ともに考える防災の未来 ―私たちの仙台防災枠組講座シリーズ

多文化防災について考えよう!

~仙台で暮らす外国人住民と一緒に学ぶ~

開催概要と参加者アンケート

日時

2019年7月27日 (+) 14:00~16:30

会場

スタンダード会議室 仙台一番町ホール店 6階C会議室

主催

東北大学災害科学国際研究所、仙台市

共催

公益財団法人 仙台観光国際協会

参加人数

38名 (定員40名)

次第

- 1. 仙台防災枠組、仙台防災枠組講座について
- 2. グループごとの自己紹介
- 3. 講義「仙台市の外国人状況と防災上の課題」
- 4. 講師コメント、質疑応答
- 5. ワークショップ「ケーススタディ2、4」
- 6. 講師コメント
- 7. 仙台防災枠組と多文化防災の関連性について
- 8. 閉講

仙台防災枠組、仙台防災枠組講座について

仙台市防災環境都市・震災復興室より、仙台防 災枠組の概略と仙台防災枠組講座の開催実績や成 果について説明。

様々な人や団体が仙台防災枠組の内容を知り、 実践することが大切であり、講座の開催目的にも なっていることを参加者へ伝えた。

また、これまでに延べ695名が講座を受講しており、事例集「未来へつなごう私たちのBOSAI2019」の制作や、「仙台防災未来フォーラム」での成果発表を行ったことを紹介した。



講義「仙台市の外国人状況と防災上の課題」

仙台市に住む、または観光などで仙台市を訪れる外国人の出身地別の割合と実数を解説。外国人の日本における防災上の課題として、「言葉」「文化・制度」「心」の3つの壁があるとして、災害時の課題や困難に見舞われた実例を紹介した。

また、こうした課題を解決するために仙台市や(公財)仙台観光国際協会が行う支援事業についても紹介し、活用を呼びかけた。



講師コメント、質疑応答

講師の東北大学災害科学国際研究所・今村文彦所長からは、多文化防災の実現のために、普段からどのようなことができるかについての解説があった。

事例集「未来へつなごう私たちのBOSAI 2019」に掲載されている具体例を紹介し、日常的なコミュニケーションや、外国語・イラストを使用した表示を地域で行うことの効果や重要性を参加者に伝え、取り組みを促した。



続いて、講師の東北大学災害科学国際研究所・泉貴子准教授からは、(公財)仙台観光国際協会が行っている災害時外国人支援事業について、実際に災害が発生した際に高い効果が見込まれる素晴らしい取り組みである、とのコメントがあった。

災害時に的確に行動するためには、普段から非常事態を 想定しておく必要があると述べ、日頃の備えの重要性を強 調した。





参加者からは、災害時外国人支援の 具体的な体制や内容についての質問の ほか、地域の防災訓練にどのくらいの 外国人が参加しているのか、などの質 問が挙がった。

ワークショップ

東日本大震災の避難所で実際に発生した、日本人と外国人との間の誤解や行き違いをテーマにしたワークショップを実施。グループ内で「避難所運営者の高齢男性」「留学生の若者」「避難者の女性」などの役割を決め、ロールプレイングを通してそれぞれの立場でどのように考えるかを話し合った。

その後、問題解決のために必要な配慮やコミュニケーションなどについてディスカッションをし、グループの代表者が発表した。



ロールプレイングを行う参加者(↓)

ディスカッションを行う参加者 (↑)

各グループに一人ずつ、在仙の 外国人が参加。言語や文化の違い により生じる課題を、自身の経験 を踏まえて語った。

発表・講師コメント





講師の今村所長・泉准教授からは、「課題解決のためにはコミュニケーションを取る ことが最も大切」とのコメントがあった。

「日本にない文化を知らないのは当然のこと」「お互いが大切に思うことや譲れない ことについて知るためには、日頃からコミュニケーションを取り理解を深めることが必 要」と解説した。

仙台防災枠組と多文化防災の関連性について

講師の今村所長から、これまでの講義とワークショップの内容を踏まえ、多文化防災 と仙台防災枠組の関連性についてミニ講義があった。



仙台防災枠組では、多様な参加者(ステークホルダー)の協力が必要と謳われており、 そのためには多文化理解を深め、防災の取り組みに結び付けることが重要である、と解 説。横浜戦略から兵庫行動枠組を経て仙台防災枠組が採択されたことや、仙台防災枠組 がこれまでの枠組と異なる点(取り組みの期間や目標・指標が具体的に定められたこ と)について触れた。



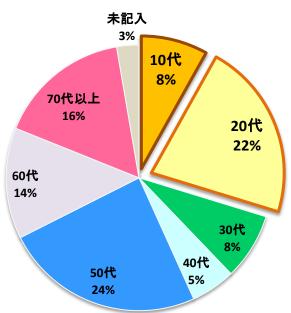
また、世界津波の日が定められたことや、津波について勉強し知識を得たことで、自身と家族を含む約100名の命を救った少女の実例を紹介。

正しい知識を得ることは 命を守ることに繋がる、と 参加者に伝えて講座を締め くくった。

受講者アンケート結果 1

講座の参加者へアンケートを行い、38名の参加者から37名分の有効回答を得た。 各設問の結果は以下のとおり。

Q1-1 受講者の年齢

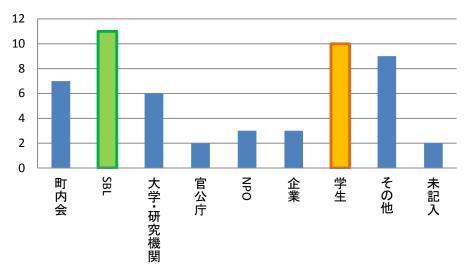


Q1-1 年齢・所属 (←↓)

これまでは比較的中高年の参加者が多かったが、今回は10代と20代を合わせて30%となり、若年層の参加者が多かった。

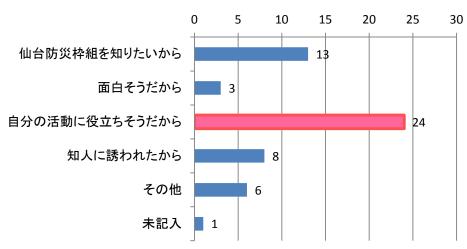
外国人留学生や多文化共生に 関心の高い学生が参加したため と思われる。

Q1-2 受講者の所属(複数回答可)



受講者アンケート結果 2

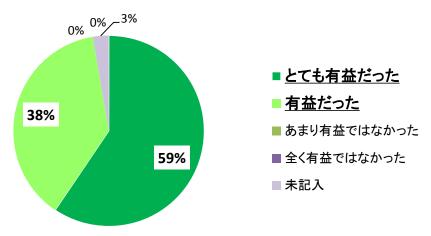




Q2 受講の動機(↑)

すでに地域の防災活動に参加している参加者が多く、事前のヒアリングからも多文 化防災に取り組む予定・意欲が見受けられた。ワークショップへの関心も高く、日本 人・外国人参加者の双方が、お互いの考え方について知る機会を求めていることが明 らかになった。

Q3 講座の内容は有益だったか

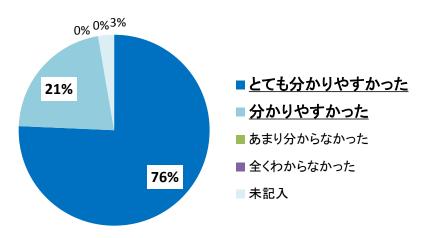


Q3 講座の内容が有益だったか(↑)

有効回答をした全ての参加者が、今回の講座を有益と考えているという結果が明らかになった。

受講者アンケート結果3

Q4 講座の内容はわかりやすかったか



Q4 講座の内容はわかりやすかったか(↑)

有効回答をした全ての参加者が、今回の講座をわかりやすかったと感じているという結果が明らかになった。

講義のほかにワークショップを行い、実際に外国人参加者と意見を交わすことで、 多文化防災をより身近に感じた結果と思われる。

Q5 自身の活動について発表してみたいか

発表したい	発表したくない	現時点ではわからない	未記入
5	9	20	3